大阪府

第39回人権啓発
詩・読書感想文
入選作品集

こころにひびけ わたしのおもい

主催／大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）
協賛／江崎グリコ株式会社、大栗紙工株式会社（OGUNO）、大阪地区トヨタ各社、株式会社ウラノ（五十音順）

令和3（2021）年2月発行

主催　大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）

目次

第39回人権啓発詩・読書感想文
募集・表彰事業について……2

詩の部門

小学校（小学部）低学年の部
へいわってどんなこと……4
なかま……6
友だち……8
相手のきもち……10

小学校（小学部）高学年の部
みんなちがって、みんないいやんか……12
「命」……14
一人一人の平和……16
いつもとかわらない日じょう……18
おもい……20
大切な命……22
本当のやさしさ……24
『言葉の使い方』……26
思いやりとは……28
心と心……30
この世で一番の「罪」……32
アトピーのこと……34
人と助け合い生きていくこと……36
むだな努力……38
ランドセル……40
希望の手……42
Ｌｉｖｅｓ Ｍａｔｔｅｒ……44
ココロ……46

中学校（中学部）の部
それはちがう……48
それぞれの色……50
私の人生の戦い……52
自分にとって大事なこと……54

読書感想文の部門

小学校（小学部）低学年の部
みんなが楽しくくらせるように……56

小学校（小学部）高学年の部
『ｍｏｊａ』を読んで……58

中学校（中学部）の部
平和の大切さ……60
『ろう者の祈り 心の声に気づいてほしい』を読んで……62

講評……64

第39回人権啓発詩・読書感想文　募集・表彰事業について

一人でも多くの方に人権について身近に考えていただくため、人権の尊さやお互いの人権を守ること、差別のない明るい社会を築くことの大切さや平和の尊さを訴えることなどをテーマに、人権啓発詩・読書感想文を、府内の小・中学（部）生から募集しました。

○主催
大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）

○募集期間
令和２年８月３日（月）～９月２５日（金）

○応募、審査
詩部門・読書感想文部門合わせて72校から1,051作品の応募があり、審査委員会において30作品を入選としました。

詩部門

小学校（小学部）低学年の部

大阪狭山市立東小学校	１年	岡（おか）　柚奈（ゆずな）
大阪市立森之宮小学校	２年	石田（いしだ）　賢太郎（けんたろう）
箕面市立萱野東小学校	３年	岡本（おかもと）　禮仁（れいじ）
箕面市立萱野東小学校	３年	堀川（ほりかわ）　いろは

小学校（小学部）高学年の部

堺市立向丘小学校	４年	伊豫田（いよだ）　莉央（りお）
堺市立向丘小学校	４年	山本（やまもと）　登見江（とみこ）
箕面市立萱野東小学校	４年	梶尾（かじお）　夏菜美（かなみ）
箕面市立萱野東小学校	４年	小林（こばやし）　悠華（ゆうか）
泉南市立新家小学校	４年	入倉（いりくら）　治南（はるな）
堺市立深井小学校	５年	北埜（きたの）　美桜（みお）
枚方市立殿山第一小学校	５年	川本（かわもと）　咲茉（えま）
寝屋川市立石津小学校	５年	角間（かくま）　杏菜（あんな）

大阪市立みどり小学校	６年	神谷（かみや）　祐那（ひろな）
大阪市立みどり小学校	６年	永野（ながの）　心深（ここみ）
寝屋川市立三井小学校	６年	秋山（あきやま）　久聡（ひさ）
寝屋川市立三井小学校	６年	石井（いしい）　空來（そら）
寝屋川市立三井小学校	６年	沖（おき）　元（はじめ）
寝屋川市立三井小学校	６年	小橋（こばし）　柚季（ゆずき）
東大阪市立英田南小学校	６年	植田（うえだ）　修史（しゅうじ）
東大阪市立英田南小学校	６年	鈴木（すずき）　香穏（かのん）
東大阪市立英田南小学校	６年	田中（たなか）　日陽（ひなた）
東大阪市立英田南小学校	６年	鳥谷（とや）　陽菜（ひな）

中学校（中学部）の部

泉南市立西信達中学校	１年	中野（なかの）　蒼空（そら）
泉南市立一丘中学校	１年	中野（なかの）　仁美（ひとみ）
東大阪市立布施中学校夜間学級	３年	※
東大阪市立布施中学校夜間学級	３年	西村（にしむら）　伸二（しんじ）

※ご本人のご希望により非公表

読書感想文部門

小学校（小学部）低学年の部

大阪市立南大江小学校	３年	空門（そらかど）　ましろ

小学校（小学部）高学年の部

泉佐野市立日根野小学校	４年	室谷（むろや）　葵都（きさと）

中学校（中学部）の部

堺市立津久野中学校	１年	寺田（てらだ）　遥菜（はるな）
大阪府立生野聴覚支援学校中学部	２年	中井（なかい）　美佑（みう）

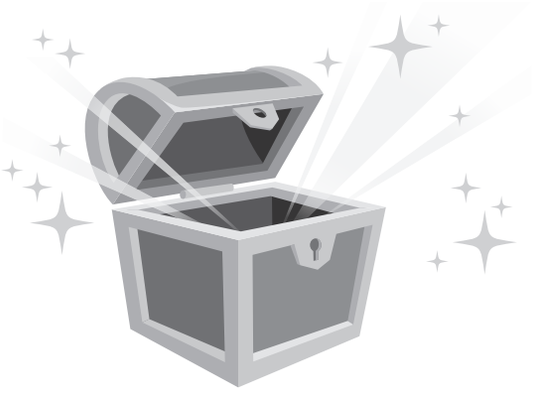
○表彰式
新型コロナウイルスの感染拡大状況を踏まえ開催中止

なかま

大阪市立森之宮小学校　二年　石田　賢太郎

ずっと
そばにいて
わからないときに
教えてくれて
しょんぼりしたとき
わらったかおで
やさしいひとことを
いってくれる
ぼくの　心の大切な
たからもの

ずっと　ずっと
わかちあって
なかよくしていこうね



友だち

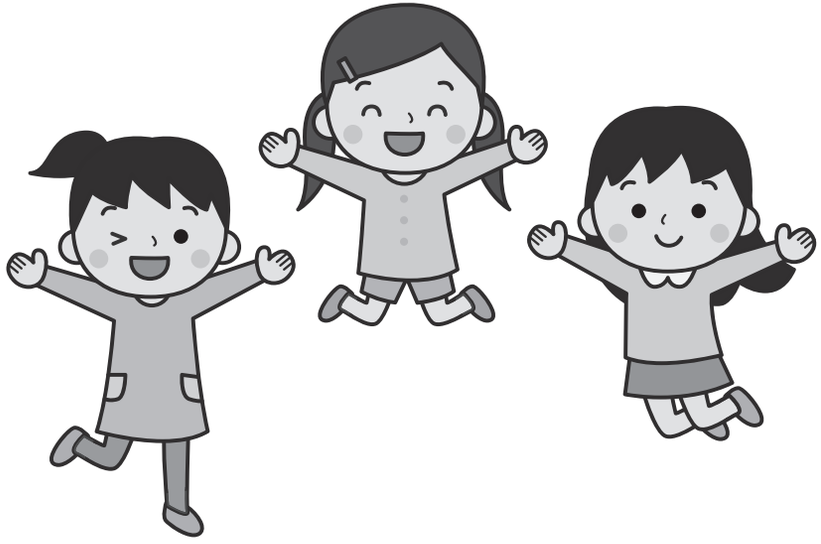
箕面市立萱野東小学校　三年　岡本　禮仁

仲がよくないクラスの子と
遊ぼうとさそってみた
やはり楽しく遊んでいない
だけどだいぶんたったそのとき
いっしゅんだけわらった
あれはたしかにわらっている
ぼくは友だちを作れた
と思った

相手のきもち

箕面市立萱野東小学校　三年　堀川　いろは

いっしょにいるとわかってくる
相手のきもちがわかってくる
はなすとどんどんわかってくる
たまにまちがってしまうけれど
またすぐにおぼえられる
もっともっとわかりたい
たくさんはなしてもっとわかろう
まちがいがなくなるまではなしつづける
わかったころにはもう大しんゆうだ
めざそう　めざそう　大しんゆう



小学校（小学部）高学年の部

みんなちがって、みんないいやんか

堺市立向丘小学校　四年　伊豫田　莉央

一人一人ちがうっておもしろい
一人一人ちがうっていいね
みんなおんなじより
一人一人ちがうほうが
楽しいな

なのに
どうしてちがうから
だめっていうの？
正しいとか
えらいとか
かしこいなんて
ないはずだよ

言葉
住んでいるところ
しゅう教
はだの色
そして思っていること

みんなちがって、みんないいやんか

「命」

堺市立向丘小学校　四年　山本　登見江

この前、ママの妹が赤ちゃんを生みました。
小さな女の子。
どうして赤ちゃんが、生まれるのだろう。
どうやって、いのちが生まれるのだろう。
それは、私も気になっている。
きっと神様が、この子を大切に育ててくれると思った人を
選んでくれたのかな。
だから、私は、ママに大切に育ててもらってるんだな。
神様ありがとう。

一人一人の平和

箕面市立萱野東小学校　四年　梶尾　夏菜美

自分にとっての平和はなんだろう
楽しく遊ぶ
いっしょに笑う
考えれば平和はたくさんある

みんなにとっての平和はなんだろう
けんかするのが平和
じゅ業するのが平和
人を助けるのが平和

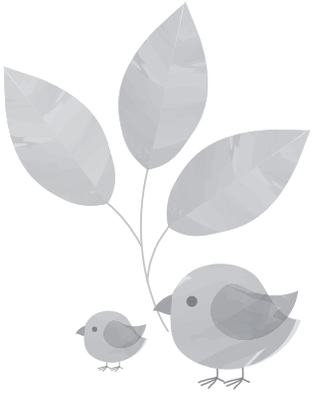
でも今こう思えば
こうやって
考えられることが
平和だと思う

いつもとかわらない日じょう

箕面市立萱野東小学校　四年　小林　悠華

いつもとかわらない日じょう
それでもしあわせ
当たり前に生きることができない人だっている
国と国とのけんかとめられない
どうしてけんかをするのだろう
人をまきこんでまでする必要はないと思う
死んでしまった人がかわいそう
私にとっての平和
それは
当たり前の生活をおくること
いつもとかわらない日じょう

友だちとのけんか
本当はしたくない
仲良くしたい　だけど
けんかをするのはだめなことじゃない
だって
けんかをすることでもっと
仲良くなれるから
いつもとかわらない日じょう



おもい

泉南市立新家小学校　四年　入倉　治南

ポカポカ
あれ？
ゾクゾク
何だろう
ズキズキ
頭とのどが…
だるい
味がしない
気持ちが悪い
風邪かな？
えっ！
新型コロナウイルス感染症？
ひとり
独り
独りきり
移したくない
移されたくない

皆同じ、同じ思い…
治ったよ！
でも、独り
完治したんだよ！
でも、本当に？
ウイルスは、もういないよ！
でも、移されたくない
やっぱり、独り…
ウイルスは恐い
命が大切だから
人も恐い
大切な人を守るために非情になれるから
本当は、感染した人も大切な人なんだ
皆、誰かの大切な人
感染した人も医療従事者も、
コロナウイルスを終息させるために頑張っている…
独りにしないために、ウイルスを知ろう
ウイルスは恐いけど、感染した人は「悪」じゃない
恐がらないために、予防対策を徹底しよう
正しい知識を学ぼう！

大切な命

堺市立深井小学校　五年　北埜　美桜

私の大切な命
お父さんの大切な命
お母さんの大切な命
先生の大切な命
お友達の大切な命
世界の人達の大切な命
みんなの大切な命
いじめられるために生まれてきたのではない
きらわれるために生まれてきたのではない
差別されるために生まれてきたのではない
幸せになるために生まれてきた

みんなも同じ
みんなで幸せになろう
苦しまなくてもいい
悲しまなくてもいい
人と人がぶつかり合わず
平和に生きよう
心にやさしさの花を咲かせて
心に負けない気持ちの花を咲かせ
心に勇気の花を咲かせて
星のようにキラキラ輝いて生きていこう
世界中を幸せの花でいっぱいにしよう

本当のやさしさ

枚方市立殿山第一小学校　五年　川本　咲茉

そばにいるのは、やさしさ。
きょりをおくのも、やさしさ。
ことわるのも、やさしさ。
受け入れるのも、やさしさ。
本当のことを言うのも、やさしさ。
本当のことを言わないのも、やさしさ。
だまっているのも、やさしさ。
笑顔にさせるのも、やさしさ。
相手のことを考えて、笑顔にさせて、
喜ばせたりできなくても、

相手のことを思って
できることをすることは、
本当のやさしさ。

『言葉の使い方』

寝屋川市立石津小学校　五年　角間　杏菜

相手の気持ちかんがえへんの？
「死ね」って言って相手はどう思う？
ネットになるとみんな急につよくなる
人の意見になみのようにながされる
人の体はかるくきずついたって死ねへん
人の心はかるくきずついて死ぬ
言葉は使い方でナイフなんかより
おそろしい凶器になる
テレビでみた
ああ
あなたのそのたった一言
他の人はなんとも思わなくても
相手はその凶器で心をさされてる

「ネット」は楽しむもの
「死」においこむものではない
考えようや
たった一言で人の命はうばえる
どんなにささいなことでも。
人の心はもろいんやから。

思いやりとは

大阪市立みどり小学校　六年　神谷　祐那

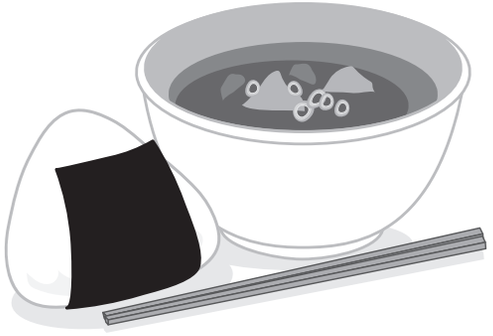
優しさとは
マスクをするということ
えん会をしないということ
大きな声で話さないということ
ソーシャルディスタンスを守るということ
責めないということ

助け合いとは
水害の時
水ぬきを手伝うということ
どろぬきを手伝うということ

地震の時
食料を分けるということ
がれき撤去を手伝うということ

ゆずり合いとは
電車でいすをゆずるということ
バスでいすをゆずるということ
満員エレベーターでゆずるということ

思いやりとは
優しさだということ



心と心

大阪市立みどり小学校　六年　永野　心深

心は糸と同じ
心と心が結ばれたり
心と心が切れたりする

どちらかの心がひっぱりすぎると、
切れてしまう
心と心が強くひっぱり合うと、
切れてしまう

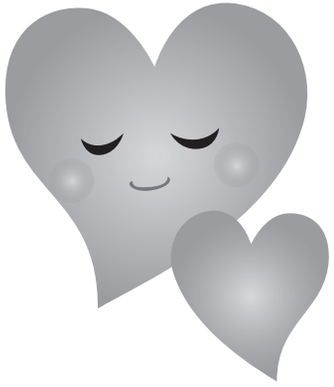
心と心は同じ気持ちで
たがいを思いやると、
かたく結ばれる

この世で一番の「罪」

寝屋川市立三井小学校　六年　秋山　久聡

もう今はないのですが
ぼくはかつぜつが悪いという
その何気もないことでからかわれていたことが
ありました
表にあらわさずに
裏で泣いている人がいるのです
ぼくみたいなことがあり
苦しんでいるのならば
きっとあなたを一番しんらいしてくれる
「家族」や「先生」や「しんらいできる友達」
などに

うちあけてみるのも
よいでしょう
人の人権をうばうことが
この世で一番の「罪」
ぼくはそう思っています



アトピーのこと

寝屋川市立三井小学校　六年　石井　空來

私は小さいころから
アトピー性皮膚炎で
体にたくさんきずがある。
薬を飲んでも、ぬっても治らない。
そのきずのことは
あまり気にしてなかった。
でも前にそのきずを見て、
「なんなんそのきず。
そんなんじゃ人にきらわれんで～W」と笑われた。
その場では
「え？」と言いながら笑顔を作ったけど
心の中では体のことを言われてなやんでいた。

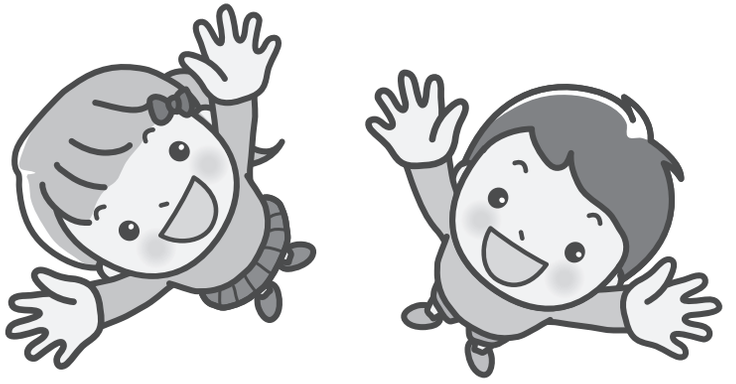
その人とは話をして
あやまってもらったけど
やっぱり言われたことはきずついた。
だからみんなも何も思わないで
言った一言で人をきずつけないように
アトピーへの「理解」を深めてほしいと思う。

人と助け合い生きていくこと

寝屋川市立三井小学校　六年　沖　元

人権は　自分だけにあるわけじゃない
友達　親　先生　近所の人
全員に　人権がある
そのことを　忘れてはならない
この世に生まれてきた証
それが人権
人をきずつけることは　人として生まれてきた証をきずつけること
きずつけられた人は　悲しむ　とてもくやしい
きずつけられた人は　きずつけた人を　きずつけ返すかもしれない
そうならないために　人権を守る
たがいに　きずつけない

みんなで仲間ということを考え　助け合う
そういうことが必要だと　ぼくは思う



むだな努力

寝屋川市立三井小学校　六年　小橋　柚季

今、世界中で新型コロナウイルスが流行っている。
そして、病院では、お医者さんやかんご師さんが
自分の命をかけてかんじゃを救おうと
がんばってくれている。
でも…がんばってくれているお医者さんたちが
コロナウイルスにかかってるわけでもないのに、
家のドアなどに『死ね』と
書かれたはりがみをはったり、
少し外に出ただけで
「外に出て来るな!!」と家の中にもどしたりなど、
人の心を分かっていないような人が
お医者さんなどの努力をむだにしていく。

それでもお医者さんたちは
誰かを救うために今も、一生懸命働いている。
こんな風にして誰かの努力をむだにして、
差別をし、人の心を分かろうとしない人たちをなくす、
または、みんなが人の心を考えられる心の清い人になれるような世界を、
出来るだけ早くつくり出すことが大切なのかもしれない。

ランドセル

東大阪市立英田南小学校　六年　植田　修史

赤色のランドセル
みんなバカにしたり
女だとか言うけれど
やっぱりぼくは赤が好き
ヒーローの色だから

青色のランドセル
みんなバカにしたり
男だとかいうけれど
やっぱり私は青が好き
空と海の色だから

ぼくの赤色
ぼくだけの赤色
わたしの青
わたしだけの青
十人十色でいいじゃない

希望の手

東大阪市立英田南小学校　六年　鈴木　香穏

「コンコンコン」
誰かが私の心のとびらをたたいてる
何重ものかぎをかけて、
自分でも開けられなくなっていたとびら
いつしか、人に避けられていたとびら
外の世界と関わらないためのとびら

「コンコンコン」
誰かが私の心のとびらをたたいてる
私のそんざいを忘れずにいてくれた人がいる
私が苦しんでいることを、
このとびらがあることを、
忘れずにいてくれた人がいる

「コンコンコン」
誰かが私の心のとびらをたたいている
（信じてもいいの？）

その不安と恐怖に答えるように
一筋の光が差しこんだ
あたたかい光が

「ゴンゴンゴン」
みんなが私の心のとびらをたたいている

とびらが開く
みんなが手を差しのべる
その手は私を、
人々を、
希望であふれる世界へと連れて行ってくれる

「コンコンコン」
あの音が聞こえる

とびらをたたいてくれることを
待っている人へ
大丈夫
私達が希望であふれる世界をつくるから

Ｌｉｖｅｓ　Ｍａｔｔｅｒ

東大阪市立英田南小学校　六年　田中　日陽

大坂なおみさんがテニスの試合でマスクをつけて出てきた。
マスクには差別で殺された黒人の名前が書いてあった。
「私はテニスプレーヤーである前に黒人の女性です。」と言った。

「Ｂｌａｃｋ　Ｌｉｖｅｓ　Ｍａｔｔｅｒ」
黒人の命は大切だ

なおみさんのマスクは７枚だった
でももっとたくさんの人が殺されている
差別を受けている
皮ふの色が黒いだけで。
黒かったらなんやねん
白かったらなんやねん
黄色かったらなんやねん

みんな同じ人間やんか

「Ｂｌａｃｋ　Ｌｉｖｅｓ　Ｍａｔｔｅｒ」
黒人の命は大切だ

なぜ差別をしてしまうのか
自分とちがうからなのか
怖いからなのか
ちがうのは当たり前やん
怖がらんと
しゃべってみたらええやん

「Ａｌｌ　Ｌｉｖｅｓ　Ｍａｔｔｅｒ」
みんなの命は大切だ

まずは私の心から

ココロ

東大阪市立英田南小学校　六年　鳥谷　陽菜

人が悲しむことをするのは
相手の気持ちを
想像できていないからじゃない？
常に相手の立場に立ったら・・・
って考える
それだけで
人に優しくしようって思えるよ

人の気持ちによりそうことは
自分に向き合うこと
人によりそい
自分に向き合えば
自然と人に優しくなれる

中学校（中学部）の部

それはちがう

泉南市立西信達中学校　一年　中野　蒼空

部活の時チームメイトが人に笑われた
他の部の子に笑われた

一番必死だったのに

なんで笑われた？

その子はいつもみんなを笑わせてくれる
だからその時思った
それはちがうだろ

必死の人を笑うなよ

それぞれの色

泉南市立一丘中学校　一年　中野　仁美

みんな、自分の色をもっている。
小さな女の子も、おじいちゃんも、犬ももっている。
それが、赤色の人も、青色の人も、黄色の人もいる。
でも、その色を他人がぬりかえることはできない。
だって、自分の色だから。
それに、その色を他人が消すこともできない。
だって、自分だけの、自分の色だから。
みんな、自分の色をもっている。
みんな、みんな、自分だけの大切な色をもっている。

私の人生の戦い

東大阪市立布施中学校夜間学級　三年

私若いけど、人生は、
長かった
差別や、軽蔑厳しい攻撃を
受けても
負けたくない

優しくされるより
自分が他人に優しくできる
強さを持っている人に
なりたい

それはなぜか。
自分が受けたり
イジメって

今の家族の問題もそうだが
世界の中のいろいろな問題も
苦しい　虚しい

気づかないうちに
いじめが繋がる　そんな世界
でも

強いグループに負けず
弱い人の味方となって
心の支えを持てる人になる
それが大事だと思う

自分にとって大事なこと

東大阪市立布施中学校夜間学級　三年　西村　伸二

何事もなく一日が始まること
そしてご飯を食べられること
差別なく人と接すること
何気ない一言で人を傷つけないこと
人の心の声を聴くこと
個人の人権を尊重すること
知らないうちに忘れ去られていく人への気遣い
人にとって一番大切なこと

読書感想文の部門

小学校（小学部）低学年の部

みんなが楽しくくらせるように

大阪市立南大江小学校　三年　空門ましろ

わたしがこの本をえらんだのは「じつは、わたしにしょうがいがあるのは、あなたのせいなのです。そう言ったら、おどろきますか。」というおびが気になったからです。

作しゃは生まれつき体のきん肉がだんだん弱くなっていくびょう気で、車いすと人工こきゅうきを使っているえび原ひろみさんという方です。この本を読んだ感想は三つあります。

一つ目は「そんげんし」についてです。そんげんしとは、なおる見こみのない人が自分でしをえらぶ事です。えび原さんは、心のそこからしにたいと思っている人なんてぜったいにいないと言います。人のめいわくになるから、とえんりょしつづけることにきたいが持てなくなっているのだ、と書いてありました。

わたしは生まれた時ほかの赤ちゃんより小さく、人工こきゅうきを使っていました。もし今も使っていたら、入れないお店や通えない学校があったかもしれません。それを思うととてもかなしいです。しをえらんでいるのではなく、えらばされているのかもと思いました。もしこの本を読んでいなかったら、しなせてあげるのもその人のため、と思っていたと思います。

二つ目は、手だすけについてです。えび原さんは学校ではクラスメイトがサポートしていました。友だちに毎日おねがいしないといけないのは気をつかうし、たのまれる方も大へんだったのではと思いました。学校でもヘルパーさんに来てもらえるようになったら安心だろうなと思います。

三つ目は、しょうがいについてです。びょう気である事としょうがいがあることはべつのことで、たとえばたて物に入れないのは、車いすだから入れないのではなく、かいだんしかないから入れないのであって、たて物のつくりがちゃんとしていれば、車いすはしょうがいではなくなる、しょうがいはなくせると書かれていて、その考え方がうれしかったです。なぜならわたしの母も車いすにのっていて、わたしもそう思っていたからです。

わたしは、四月に東京から大阪に引っこして来ました。理由は、母のヘルパーさんが半分い上来れなくなってしまい東京での生活が出来なくなったからです。三月の終わりに、小学校をてん校しないといけないと聞いてすごくショックでした。父は仕事で東京にのこっているので四月からははなれて生活しています。

この本を読んで、しょうがいのある人やその家ぞくが何かをあきらめなくてはならない、という思いをするのは、わたしでさい後になってほしいと思いました。そして、どこに住んでいてもひつようなな人がひつようなな分サポートをうけられるようになってほしいと思います。

『わたしが障害者じゃなくなる日』
著　海老原　宏美
旬報社

小学校（小学部）高学年の部

『ｍｏｊａ』を読んで

泉佐野市立日根野小学校　四年　室谷　葵都

私は『ｍｏｊａ』という本を読みました。この本は毛深くて「もじゃ」と言うあだ名を付けられからかわれそれ以降自分の肌をだれにも見せない女の子、理沙が、友達や家族のおかげで自分の体を受け入れて自分の事を好きになっていくお話です。

私が不思議に思ったことは、どうして毛深いことを家でも必死にかくして、家族にまで見せなかったのかということです。友だちに言うのははずかしくても、家族にならはずかしくないし、お母さんに言った方が毛が生えないようにいろいろ考えてくれてなやみもなくなるかなと思ったからです。

好きなところは、自分のはだをタイツや長そででかくしていた理沙が、友達もみんな身体のなやみを持っていることを知り、友達にはげまされたりして、自分の意志でタイツを脱いで素足で海に入ったところです。だれかに無理矢理脱がされたのではなく、自分で決めた勇気に感動しました。海に足をつけた理沙はきっと、くもっていた心がスカッと晴れ、初めて友達と一緒に自分の素肌で風を感じることができて、気持ち良かったと思います。

わたしがこの本を読んでわかった事は、

「人にはそれぞれ個性があって悪い所が一つも無く、何もかもがかんぺきな人などいない」

「一人一人が唯一無二な存在」

という事です。人とちがう事になやみ、人の目を意識しすぎて悪い所と一緒に良い所までなくしてしまう人もいます。私も友達をうらやましく思ったり、自分に自信が持てない時もあるけれど、自分の事に自信を持って自分をいつでも好きでいて、これからも新しい事にどんどんチャレンジしていきたいと思います。

『ｍｏｊａ』
著　吉田　桃子
講談社

中学校（中学部）の部

平和の大切さ

堺市立津久野中学校　一年　寺田 遥菜

原爆。それは多くの尊い命を奪ったもの、そう私は思っていた。八月六日、九日。どれほど多くの命が失われたか。原爆は怖く、もう二度と起こってはいけないもの、そうも認識していた。

けれど、私はこう思っていた。怖いっていうのは分かっていても、見た事がないんだよな…、と。私の小学校では戦争の話などを聞く集会はあったが、写真、絵はなかったため、わかりにくかったのである。皮膚が垂れ下がっているというのも、よく分からなかった。

だが私は、ある一冊の本で原爆とはどんなものかを思い知らされる。『平和のバトン』だ。私はその本の中にある絵を見て絶句した。私の頬に一筋の涙が伝った。なんて惨い有り様なのだろうか。人が、人ではないように思えた。原爆はなんと恐ろしいものかと、改めて分かった日になった。

私はこの絵を描いた高校生の皆様が凄いとも思った。これはフィクションではなく、ノンフィクション。本当にあった出来事だからこそ、難しいのではないだろうか。だってそうだろう。本当に体験している方々にそって絵を完成させないと、それはただの嘘となってしまう。そんなことが、許されると思うか。いや、到底思えないだろう。被災された方の目で見た光景を何も知らない高校生が絵にする。すなわち、被災された方の目とならないといけないのだ。だが、そんな難しいことを何度も何度も修正して写真かと思わせるような絵を描いてくれた高校生に私は深くお礼申し上げたい。原爆をしらない子たちでも、絵を見れば伝わる。これから先、こんなことが起こらないようにしようね。ずっと平和でいたいね。そんな会話だって出来る。そんな、原爆を絵にしてくれた高校生の方に私は感謝している。

けれど、私はこの本を通してこう思った。何故、思い出したくないであろう思い出を語ってくれたのだろう、と。この本で証言された方の中には友人、家族などを失った

人だっているだろう。そんな思い出を、どうして語ってくれたのか。辛い思い出は胸の中にそっと残しておいた方がいいのではないだろうか。私は考えた。その時、小学校の戦争の話を聞く集会でこんなことをおっしゃっていたことを思い出した。

「私がこんな話をするのは、平和のためです。みなさんにも原爆がどれほど恐ろしく、今の世がどれほど平和で幸せか分かってほしいからです。」

私はこの時、この本で証言された方もそうなのではないかと思った。辛く、言いたくなくても平和のため。そう思って証言されていたのではないだろうか。私たちのために。平和しかしらない、私たちのために。なんと有難いことなのだろうか。このような心優しき方々がいつまでもこの日本にいてほしい、そう思った。

今の世の中は平和だ。そんな平和な日本をつくってくれたのは紛れもなく被災された方だろう。これから生まれて来る子どもたちには、同じ思いをさせたくない、そういった思いがあったのではないだろうか。これから先、証言される方がいなくなったら、もう原爆の記憶を消し去ってもいいのか。私たちは確かに、原爆が落とされた光景を実際には見ていない。私たちは見てないし、別にいいじゃん。そう思っていた時期もあったが、この高校生を見て、百八十度意見が変わった。見ていなくたって、体験していなくたって出来ることがあるかもしれない。残念だが、今の私に出来ることは思い付かない。だが、この高校生のようになって、これから生まれてくる子どもたちに分かってほしいのだ。原爆とはどういうものかというのを。けれど、私たちとは関係ないと思ってほしくはない。今でも後遺症が残っている人がいるのだ。そのことを考え、原爆と向きあってほしいと思った。もっともっと未来の日本でも、八月六日、九日は原爆が落ちて、尊い命が奪われた日。そう思ってほしいと、強く強く私は願う。原爆という二文字がみんなの心に残ってくれますように。

『平和のバトン』
著　弓狩　匡純
くもん出版

『ろう者の祈り　心の声に気づいてほしい』を読んで

大阪府立生野聴覚支援学校中学部　二年　中井　美佑

「心の声に気づいてほしい」。図書館でこのサブタイトルを見たとき、何か共感のようなものを覚えた。気づいたら私はこの本を手に取っていた。本を開いてみると、本文から一部抜かれた文章が書いてあった。そこには、

「ろう者の皆さんは何も特別なことをしてほしいと言っているのではないのです。みんなと仲良く生きていきたいと思っているだけなのです。」

と書かれていた。まさにその通りだと思った。私たちのようなろう者は、確かに普通の人とは違う。しかし、私たちは耳が不自由なだけであって、それ以外のことは全て健聴者と同じなのだ。本に書いているように、ろう者はみんなと仲良く、平和で幸せな生活を送って生きていくだけで構わないと思っている。その思いは私も同じ。差別のない、みんな平等な世界があったらどんなにいいことだろう。

この本を読んで印象に残ったところがある。そのページはＮＰＯ法人「デフサポートおおさか」の稲葉通太さんについての人生が書かれているページだ。私は小学六年生の頃からデフサポートおおさかに通っている。私がパワーポイントに興味を持ったのも、稲葉先生のおかげだ。いつも明るく色々なことを教えてくれる。稲葉先生は小さいころ、事故によって聴力を失ったと聞いたことがあるが、そのあとの中学、高校生活に関しては聞いたことがなかった。この本を読んでとても驚きそして尊敬した。それは中学生活を楽しんでいた時の頃、稲葉先生は

「自分は死ぬまで聞こえない。なら聴者の五倍、十倍頑張ろう」

と考えたことについてだ。聴覚障がいを抱えているという現実を逃げずに受け止めて、そして目標を立てて頑張る。私は中学生でこの考え方をすることができるのはすごいことだと感動した。稲葉先生は、ろう者でありながらも決して諦めずに自分の人生と向き合っているのだなあと思った。稲葉先生が通っていた中学校は、人権教育が進んでいたとある。先生に情報保障をしてほしいと相談した時に稲葉先生は無理かもしれないと覚悟して、

「口を見てもわからないから、できたら紙に書いてほしい」と言ったそうだ。勇気があるなあと思った。

私は小学生のとき、地域の小学校に一日だけ交流をしに行ったことがある。その時に受けた授業では、先生が何を言っているのかわからなかった。私は「紙に書いてほしい」と言う勇気がなかった。だから、稲葉先生はとても強いと思う。

その先生は、

「友だちと机をくっつけよ。一週間ずつかわりばんこに、先生の指示や友だちの話を書かせるからな」

と言ったのだ。さらに、その先生は願いを聞いてくれた上に友だちと仲良くできるように、と考えてくれていた。稲葉先生はその案のおかげで色々な人と話せた。このような先生が身の回りにいたら、きっとろう者は救われるのではないだろうか。

また、稲葉先生は聴者の皆さんに向けて、

「助けてあげたいではなくて、友だちになりたい、話したいというところから接してくださいませんか。ろう者は、ケンカができる関係を作りたいと思っているんです。」

と伝えた。助けてあげる、という目線ではなくて、ろう者も聴者とも、平等な関係を作ってほしいと願っていることがとてもよくわかる。

私たちのようなろう者は、ろう者が安心して手話を使えるような環境や、友達、自分の障がいをわかっていてくれる社会を求めている。ただ求めているだけではなく、私たちも何か活動していかないと何も変わらないままだと思う。まずはろう者がいること、そしてろう者には誰かの支えが必要だということ、それらの理解を得たいということを伝えていかなければいけない。

最後に、この本からろう者は努力を忘れずそして人とつながることを恐れずに常に前を向いて進んでいくことを学んだ。私は今、中学生だ。まだ社会人ではないから、社会人にしかわからない苦労がきっとあると思う。落ち込むこともあるだろうし、傷つくこともあると思う。だが、そんな時はこの本を読み返して、力をもらうつもりだ。本の中のろう者の方々に。

『ろう者の祈り　心の声に気づいてほしい』
著　中島　隆
朝日新聞出版

講　評

審査委員長　古川　知子
（神戸親和女子大学）

今年度「第39回人権啓発詩・読書感想文」に、大阪府内から１０５１点の応募がありました。内訳は、詩部門で９６０点、読書感想文部門は91点でした。一次審査通過作品が80点となり、さらに審査を重ね入選作品を30点選ばせていただきました。多くの皆さんが応募してくださったことに感謝するとともに、作品の中から選ばれた30人の皆さんの入賞を心からお祝い申し上げます。

詩と読書感想文の部門ごとに、小学校(小学部)低学年・高学年、中学校（中学部）に分けて、審査をさせていただきました。今回、夜間学級で学ぶ生徒さんも入賞されました。コロナ禍で感じた内容も届けていただきました。学校教育を通して、人権問題を考える貴重な機会となっていると実感しています。

講評ですが、まず、詩の部門です。授業で学んだことや日常の友だちとのやりとりを捉え、子どもたちが疑問や矛盾を感じたことや考えたことをストレートに表現しているところが印象に残りました。例えば、「いじめはよくない」という発信ではなく、「相手の気持ちを想像しよう」という言葉には、大人にも届けたいメッセージ性があります。「命」「思いやり」「優しさ」「不安」「平和」等、子どもたちの心のフックにひっかかった言葉に対して、私たち審査委員も改めて考えさせられました。

次に、読書感想文の部門です。一冊の本を選んだ時の、子どもたちのワクワク感やドキドキ感が伝わってくるようでした。それぞれの感想には、互いの違いを尊重し合う視点に触れ、さらに自身のこととして捉えた内容が記されていました。子どもたちの成長の過程で、人権課題について考える機会の大切さを痛感しました。

本取組みについては、保護者の方々を始め、大阪府内の小学校・中学校・支援学校において、教職員の方々が子どもたちと向き合い、やりとりをしてくださっていることが想像され、何よりありがたく大事なことだと考えます。コロナに負けず、この作品集が大阪府内の各学校等において活用され、人権課題に対する取組みが、豊かに拡がっていくことを願っております。